

愛郷
無限

土屋館
どや
だて 通信

発行者：大曲・花火通り商店街
文責：辻

お問い合わせ：080-1265-7035
tuck-t@akita-tsujiya.jp

2015年5月4日号 NO.513

写真提供：大崎市

Subject：訓書滋身【無頼(ぶらい)のススメ】

伊集院静さんの新刊からとても考えさせられました。

【無頼のススメ】（新潮新書）

伊集院 静 著 新潮社 700円（税別） ISBN-10: 4106106051

「無頼(ぶらい)」というと協調性なく喧嘩ばかりする荒くれ者、アウトサイダーやドロップアウトのイメージがありますが、全くそうではないそうです。

現代人は、情報や知識、主義やイズム、他人意見や周囲の評価ばかりを気にし、それらに安易に頼ることがとにかく多い。しかし【無頼】はそれらに全く頼らない。自分の頭と身体と経験を使って考え、それに培われた直感（内なる声）にしっかりと耳を傾け、【頼るものなし】という覚悟を持って自ら動く【人としての心の持ち方、生きる勢い】が【無頼】なのだそうです。

そう言うと、協調性なく、我が強く、ゴーイング・マイ・ウェイな人を指すように思えますが、そうではない。180度逆なのです。自分に自信を持って、自分の利を優先し、己の思うままに唯々突き進む人間は全く無頼とは呼べない。腕っぷしが強かったり、他者を従わせることができる偉い肩書きを持っていることでもない。

まずは自らが【自分はどうしようもない人間で、酷い怠け者で、能力もさほどない】という自分自身の、人間が生まれ持った“業(ごう)”とも言える弱さを、とことん知っているということが大前提なのだそうです。「俺は救いようのない駄目な人間だ。世の中で一番の怠け者かも知れない」と心から自覚して、そこから【頼るものなし】という覚悟を持って自ら考え・動く。そういう人はなかなか倒れず、そして負けるものではないそうです。だから真に助け合うこともできる。だから怨の心も自ずから生まれる。

ある意味西洋のルネッサンス(人間賛歌)とは真逆で正に日本人らしいと言えましょう。

浩然の気(こうぜんのか)

「浩然の気」とは中国の孟子が説いたと言われ、「正しい道を行う人間の内部から発する気」のことで、正しく養い育てていけば天地の間に満ち、万物の生命力や全ての活力の源になるそうです。一方で、道義が伴わないとどんどんしぼみ無くなるそうです。

正しい道を考え、道義を身につけ、正道を行えば生じる浩然の気。他人の目や評価・批判ばかりを気にすることなく行動をする。そこから転じて、モノゴトにとらわれない、豊でおおらかな気持ちを指す言葉になったそうです。前段の【無頼】の本当の意味にも通じるのではないのでしょうか？

今の日本にはこの「浩然の気」が全く感じられないと、さる偉い方が言われたそうです。

【無頼】と【浩然の気】。どちらも今の世ではなかなか感じられなくなっていると思います。この欠如が日本人の精神変化をもたらしたとても大きな要因であることは間違いのないでしょう。